

Title	Cosmetic outcome and patient satisfaction after skin-sparing mastectomy for breast cancer with immediate reconstruction of the breast
Author(s)	上田, さつき
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49865
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について <a>〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	うえだ きつき 上田 きつき
博士の専攻分野の名称	博士(医学)
学位記番号	第 22531 号
学位授与年月日	平成20年9月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	Cosmetic outcome and patient satisfaction after skin-sparing mastectomy for breast cancer with immediate reconstruction of the breast (全乳腺切除術・一期的乳房再建術における整容性客観的評価と患者満足度の検討)
論文審査委員	(主査) 教授 野口眞三郎 (副査) 教授 細川 互 教授 木村 正

論文内容の要旨

〔 目 的 〕

乳癌手術において、多発腫瘍や広範囲の非浸潤癌など乳腺部分切除術の適応とならない症例に対して、近年、全乳腺切除術(Skin-sparing mastectomy:以下SSM)や乳輪乳頭温存全乳腺切除術(Nipple-sparing mastectomy:以下NSM)を行い、同時に乳房再建する術式が欧米において盛んに行われるようになってきた。しかし日本人女性において、このような術式の安全性や整容性に関する検証はなされていない。大阪大学乳腺内分泌外科では2000年よりNSMおよびSSM・一期的再建術(skin-sparing and nipple-sparing mastectomy with immediate reconstruction of the breast:以下SMIBR)を臨床的に導入しており、本研究はその安全性と整容性および患者満足度について、従来からの乳房切除術(total mastectomy:以下MST)、乳腺部分切除術(breast-conserving surgery:以下BCS)と比較検討した。

〔 方 法 〕

＜対象＞

2000年から2004年に大阪大学乳腺内分泌外科で行った初発乳癌手術症例のうち、70歳以上と術前化学療法症例を除く430例(SMIBR74例、BCS178例、MST178例)を対象とした。SMIBRのうち、SSMは41例、NSMは33例であった。再建法は広背筋皮弁法(以下LDMC)45例、下腹壁動脈穿通枝皮弁法(以下DIEP)24例、腹直筋皮弁法(以下TRAM)4例、インプラント法1例。

＜整容性の評価＞

外科医1名、形成外科医1名、看護師2名が、各症例につき正面およ

び左右斜めの3方向からの写真による評価を行った。日本乳癌学会整容性評価ガイドラインに従い、①乳房のサイズ、形、瘢痕、②乳輪乳頭のサイズ、位置、色調、③乳房下降線の位置の各項目についてスコアリングして合計10点満点での評価を行い、各評価者によるスコアを平均したものを評価点数とし、これに基づいてExcellent (score \geq 9)、Good (9 $>$ score \geq 7)、Fair (7 $>$ score \geq 5)、Poor (5 $>$ score)の4群に分類した。

<QOL評価>

「厚生省がん薬物療法におけるQOL調査票(QOL-ACD)」と日本乳癌学会「乳癌患者用QOL調査票(QOL-ACD-B)」を用い、術後化学療法および放射線治療終了後6ヶ月以上経過した症例のQOLを評価した。QOL-ACDから活動性6問、身体状況5問、全体のQOL1問、QOL-ACD-Bから身体症状・疼痛6問、服装その他のポディーイメージ2問、性的面1問、母性4問の計25問に関して5段階評価法による回答を得た。日本乳癌学会のQOL評価ガイドラインに従って、各項目の評価点を0、25、50、75、100とし、グループ項目はその合計点を100点満点に換算した。

<統計解析>

整容性評価はMann-WhitneyU検定、QOL評価はStudentT検定を用いてSMIBR群、MST群、BCS群を比較検討した。

[成 績]

<予後>

観察期間中央値はSMIBR 50ヶ月、MST 54ヶ月、BCS 56ヶ月であった。局所再発はSMIBR群で4例(5%)、BCS群4例(2%)、MST群3例(2%)に認められた。乳房内再発についてはSMIBR群とBCS群で有意差は無かった(p=0.19)。5年遠隔無再発率にも各群間での有意差はなかった(SMIBR 91% BCS 94% MST 90%、p=0.387)。

<整容性>

術後6ヶ月以上経過し、3方向からの写真評価が可能であったのはSMIBR群56例、BCS群47例であった。対象例全例比較では、SMIBR群ではPoorと評価された症例は9%あり、BCS群21%に比して少なかったが、有意差は無かった(p=0.2)。また年齢調整後の比較でも両群に差は無かった(p=0.8)。SSM群とNSM群を比較しても評価に有意差はなかった(p=1.0)。

以上より、SMIBR群はBCS群と同等の整容性であると評価された。

<QOL>

回答率はSMIBR群70%(50/71例)、MST群77%(121/158例)、BCS群81%(125/154例)であった。「活動性」、「身体状況」、「全体のQOL」において3群に有意差はなかったが、「ポディーイメージ」ではMST群に比してSMIBR群、BCS群ともに患者満足度は有意に高かった(p<0.05)。一方「身体症状・疼痛」と「性的面」に関しては、BCS群はMST群より優れていたが(p<0.05)、SMIBR群とMST群間には有意差は無かった。

[総 括]

SMIBR法は乳房温存手術の適応でない症例に対してBCS法とほぼ同等の

整容性および満足度を保てる優れた術式であることがわかった。比較的乳房の小さい日本人女性においては本術式の適応は広く、乳癌患者の術後のQOL改善に大きく寄与できるものと考えられる。しかし局所再発をきたす症例もあることから、慎重に適応症例を選択する必要があることがわかった。

論文審査の結果の要旨

近年、乳癌の手術術式は大きく変化し乳腺部分切除術が主流となり乳癌患者のQOLは大きく改善した。大阪大学乳腺内分泌外科では、乳腺部分切除術の適応とならない多発腫瘍や広範囲の非浸潤癌などの症例に対して、全乳腺切除・一期再建術が標準術式の一つとして積極的に実施されている。本申請者は2000年から2004年の間に当科で乳癌手術を受けた症例を対象に写真評価およびアンケート調査によるQOL評価を行い、これまで検証されていなかった全乳腺切除・一期再建術(74例)のQOLを乳腺部分切除(178例)および乳房切除(178例)と比較検討した。その結果、全乳腺切除・一期再建術では乳腺部分切除と同等の整容性が得られ、かつ、満足度は服装や公共の場での入浴など外見に関して乳房切除より有意に良好で乳腺部分切除と同等であることを、また、治療成績も乳房切除および乳腺部分切除に比べ遜色がないことを示した。

欧米では盛んに実施されている本術式が比較的乳房の小さい日本人女性に対しても高いQOLを保ちながら、かつ、安全に実施し得ることを明らかにした本研究は、今後の本術式の一般診療への普及に貢献することが期待され、学位の授与に値すると判断する。